

幼年時代

室生犀星

青空文庫

大正八年八月

私はよく実家へ遊びに行つた。実家はすぐ裏町の奥まった広い果樹園にとり囲まれた小ぢんまりした家であつた。そこは玄関に檜が懸けてあつて檜ひのきの重い四枚の戸があつた。父はもう六十を越えていたが、母は眉の痕の青青した四十代の色の白い人であつた。私は茶の間へ飛び込むと、

「なにか下さいな。」

すぐお菓子をねだつた。その茶の間は、いつも時計の音ばかりが聞えるほど静かで、非常にきれいに整頓された清潔な室であつた。

「またお前来たのかえ。たつた今帰つたばかりなのに。」

茶棚から菓子皿を出して、客にでもするように、よくようかんや最中を盛つて出してくれるのであつた。母は、どういう時も菓子は器物に容れて、いつも特別な客にでもするよ
うに、お茶を添えてくれるのであつた。茶棚や戸障子はみなよく拭かれていた。長火鉢を

隔つて坐つて、母と向い合せに話すことが好きであつた。

母は小柄なきりつとした、色白なというより幾分蒼白い顔をしていた。私は貰われて行つた家の母より、実の母がやはり厳しかつたけれど、楽な気がして話されるのであつた。

「お前おとなしくしておいでかね。そんな一日に二度も来ちやいけませんよ。」

「だつて来たけりや仕様がなないぢやないの。」

「二日に一ぺん位におしよ。そうしないとあたしがお前を可愛がりすぎるように思われるし、お前のうちのお母さんにすまないぢやないかね。え。判つて——。」

「そりや判つている。じゃ、一日に一ぺんずつ来ちや悪いの。」

「二日に一ぺんよ。」

私は母とあうごとに、こんな話をしていたが、実家と一町と離れていなかつたせいもあるが、約束はいつも破られるのであつた。

私は母の顔を見ると、すぐに腹のなかで「これが本当のお母さん。自分を生んだおっかさん。」と心のそこでいつも呟いた。

「おっかさんは何故僕を今のおうちにやつたの。」

「お約束したからさ。まだそんなことを判らなくてもいいの。」

母はいつもこう答えていたが、私は、なぜ私を母があれほど愛しているに関わらず他家へやったのか、なぜ自分で育てなかつたかということ疑っていた。それに私がたった一粒種だったことも私には母の心が解らなかつた。

父は、すぐ隣の間^まにいた。しかし昼間はたいがい畠に出ていた。私はよくそこへ行つてみた。

父は、葡萄棚や梨畠の手入をいつも一人で、黙つてやっていた。なりの高い武士らしい人であつた。

「坊やかい。ちよいと其処^{そこ}を持つてくれ。うん。そうだ。なかなかお前は伶俐^{りれい}巧^{こう}だ。」と、父はときどき手伝わせた。

畠は広がつたが、林檎、柿、すもも等が、あちこちに作つてあつた。ことに、杏の若木が多かつた。若葉のかげによく熟れた美しい茜と紅とを交ぜたこの果実が、葉漏れの日光^{ひかり}に柔らかくおいしそうに輝いていた。あまりに熟れすぎたのは、ひとりで温かい音を立てて地上におちるのであつた。

「おとうさん。僕あんずがほしいの。採つてもいいの。」

「あ。いいとも。」

私は、まるで猿のように高い木に上った。若葉はたえず風にさらさら鳴って、あの美しいがね色の果実は私の懐中にも手にも一杯に握られた。それに、木に登っていると、気が清^{せいせい}清^{せいせい}して地上にいるよりも、何ともいえない特別な高いような、自由で偉くなったような気がするのであった。たとえば、そういうとき、道路の方に私と同じい年輩の友だちの姿を見たりすると、私は、その友達に何かしら声をかけずにはいられないのであった。自分のいま味^{あじ}っている幸福を人に知らさずにはいられない美しい子供心は、いつも私をして梢にもたれながら軽い小踊りをさせるのであった。

畠は、一様に規則正しい畝^{うね}や囲^{かこ}いによつて、たとえば玉菜の次に豌豆があり、そのうしろに胡^{きゆうり}瓜の蔓竹がひと囲^{かこ}い、という順序に総てが整然とした父の潔癖な性格と、むかし二本の大小を腰にした厳格さの表われでないものはなかった。父の野良犬を追うとき、小柄^{づか}でも投げられるように、小石は犬にあたつた。または鳥などを趁^おう手つきが、やはり一種の形式的な道場癖をもつていて、妙に私をして感心させるような剣術を思わせるのであった。父の居間には、その襖の奥や戸棚には、驚くべき沢山の刀剣が納められてあつた。私はめつたに見たことがなかつたが、ぴかぴかと漆塗の光つた鞘や、手柄^{てつか}の鮫のぼつぼつした表面や、^{かけしるし}×に結んだ柄^{つかい}系の強い紺の高まりなどを、よく父の顔を見ていると、なにかし

ら関聯されて思い浮ぶのであった。

それに父は非常に健康であった。へいぜいは俳句をかいていた。父は葡萄棚から射す青い光線のはいる窓さきに、習字机を持ち出して、よく短冊をかいていた。幾枚も幾枚も書きそこなつて、

「どうも良く書けん。」

などと言つて、うつちやることがあった。母はそういう日は、次の間で縫仕事をしていた。れいの音一つない家の中には八角時計が、カタ・コトと鳴っているばかりであった。父も母も茶がすきであった。二人で茶をのんでいるとき、私も遊び友達に飽きてしまつて、よく其処へ訪ねてゆくことがあった。

私はよく母の膝に凭もたれて眠ることがあった。

「お前ねむつてはいかん。おうちで心配するから早くおかえり。」と父がよく言った。

「しばらく眠らせましようね。かあいそうにねむいんですよ。」

母のいう言葉を私はゆめうつつに、うつとりと遠いところに聞いて、幾時間かをぐつすりと睡り込むことがあった。そういうとき、ふと眼をさますと、わずか暫く睡っていた間に、十日も二十日も経つてしまふような気がするのであった。何も彼も忘れ洗いざらした

甘美な一瞬の楽しさ、その幽遠さは、あたかも午前^に遊んだ友達が、十日もさきのことのように思われるのであった。

母は私のかえるときは、いつも養家の母の思惑を気にして、襟元や帯をしめなおしたり、顔のよごれや手足の泥などをきれいに拭きとって、

「さあ、道草をしないでおかえり。そして此処^{ここ}へ来た^こって言うんじやありませんよ。」

「え。」

「おとなしくしてね。」

「え。おつかさん。さよなら。」

私はいつも感じるような一種の胸のせまるような思いで、わざとそれを心で紛らすために玄関を馳け出すのであった。母は、いつも永く門のところ^たに佇^たって見送っていた。

二

私は養家へかえると、母がいつも、

「またおつかさんところへ行ったのか。」とたずねるごとに、私はそしらぬ振りをして、

「いえ。表で遊んでいました。」

母は、私の顔を見詰めていて、私の言ったことが嘘だと言うことを読み分けると、きびしい顔をした。私は私で、知れたということが直覚されると非常な反感的なむらむらした気が起った。そして「どこまでも行かなかったと言わなければならぬ。」という決心に、しらずしらず体軀が震うのであった。

「だってお前が実家へ行っていったって、お友達がみなそう言っていましたよ。それにお前は行かないなんて、うそを吐くもんじゃありませんよ。」

「でも僕は裏町で遊んでいたんです。みんなと遊んでいたんです。」

私は強情を張った。「誰が言い附けたんだらう。」「もし言い附けたやつが分つたらひどい目に遭わしてやらなければならぬ。」と思つて、あれかこれかと友達を心で物色していた。

「お前が行かないって言うならいいとしてね。お前もすこし考えてごらん。此家へ来たら此処の家のものですよ。そんなにしげしげ実家へゆくと世間の人に変に思いますからね。」

「こんどは優しく言つた。優しく言われると、あんなに強情を言うんじゃないかと、す

まない気がした。

「え。もう行きません。」

「時時行くならいいけれどね。なるべくは、ちゃんとお家うちにおいでよ。」

「え。」

「これを持っておへやへいらっしやい。」

母は私に一と包みの菓子をくれた。私はそれを持って自分と姉との室へ行った。

母は叱るときは非常にやかましい人であったが、可愛がるときも可愛がってくれていた。しかし私はなぜだか親しみにくいものが、母と私との言葉と言葉との間に、平常の行為の隅隅に挟まれているような気がするのであった。

姉は嫁入さきから戻っていた。そして一人でいつも寂しそうに針仕事をしていた。私は机の前に坐って黙っておさらいをしていた。

「姉さん。これをおあげり。」

私はふところから杏をとり出した。美しい果実はまだ青い葉をつけたまま其そこ処らに幾つも転がって出た。

「まあ。おさとから採っていらしたの。」

「ええ。たいへん甘いの。」

「では母さんには秘密ね。」

「そう。いまおさとへ行つたつて叱られちゃったところさ。」

姉はだまつて一つ食べた。姉は一日何も言わないでいた。わずか一年も嫁入つて歸つて来た彼女は、生れかわつたように、陰気な、考え深い人になっていた。

「ねえさんはお嫁に行つてひどい目に会つたんでしよう。きつと。」

「なんでもないのよ。」

姉はあとと黙つていた。私達は杏の種をそつと窓から隣の寺の境内にすてた。

姉はいろいろな布きれ類や小さな美しい箱や、目の青い人形や、絹でこしらえた財布や、嫁入さきが海岸だつたというのでそこで集めた桜貝姫貝ちようちん貝などを沢山に持つていた。それは小さな手提筆筒の中にしまつてあつた。私はそれを少しずつ頒けてもらつていた。

「これもすこし上げよう。」

一つ一つ少しずつ分けてくれた。私はことに美麗な透明な貝などを綿にくるんで、やはり貰つた箱にしまつておいた。姉は、ことに小布片きれが好きであつた。様様な色彩いろの絹類を

大切に持っていた。どうしたはずみだったか、姉の名あての手紙の束を見たことがあった。
「それ何に。おてがみ！ 見せて下さい。」

私は何心なく奪うようにして取ろうとすると、姉は慌ててそれを背後に隠して、そして赧い顔をした。

「何んでもないですよ。あなたに見せても読めはしないものよ。」

私は姉が赤くなつたので、見てはわるいものだということを感じた。きっと、姉の友達から来たので、私どもに知らしてはならないことを書いてあるのだと思って、私は二度それを見ようとはしなかつた。

「かあさんにね。ねえさんが手紙をもっているつていうことを言わないでしょうね。」

姉は心配そうに言った。

「言わないとも。」

「きつと。」

「きつとだ。」

私は小さな誓いのために指切りをした。姉はお嫁前とは瘠せていたが、それでもよく肥えてがっしりした手をしていた。私はそういう風に、だんだん姉と深い親しみをもってき

た。

晩は姉とならんで寝た。

「姉さん。はいつていい？」

などと私はよく姉と一しよの床にはいつて寝るのであった。姉はいろいろな話をした。

医王山の話や、堀武三郎ほりむさぶろうなどという、加賀藩の河師かわしの話などをした。

加賀藩では河師というものがあつて、鮎の季節や、鱒の季節には、目の下一尺以上あるものを捕るための、特別な河川かわの漁師であつて、帯刀を許されていた。ことに堀武三郎と
いうのは、加賀では大川おおかわである手取川てとりがわでも、お城下さきを流れる犀川さいかわでも、至るところの有名な淵や瀬頭せがしらを泳ぎ捜ることが上手であつた。

膳部職ぜんぶしやくから下命があると堀はいつも四十八時間以内には、立派な鮎や鱒を生け捕つてくるのであつた。かれは、好んで、ぬしの棲んでいるという噂のある淵を泳ぎ入るのであつた。そのころ、犀川の上流の大桑の淵に、ぬしがいてよく馬までも捕られるということがあつた。

堀はその淵の底をさぐつて見た。夜のような深い静寂な底は、からだも痺れるほど冷却ひえぎした清水が湧いていて、まるで氷が張っているような冷たさであつた。その底に一つの人

取亀がぴつたりと腹這うていた。で、堀は亀の足の脇の下を擦ると、亀は二、三尺動いた。まるで不思議な大きな石が動くように。——その亀の動いた下に暗い穴があった。かれは其処をくぐった。内部は、三、四間もあろうと思われる広きで、非常に沢山の鱒がこもっていた。堀はそれを手取りに必要なだけ（かれは必要以外の魚はとらなかつた。）つかまえて、穴を這い出ようとすると、れいの人取亀がぴつたりと入口を蓋していた。

堀はまた脇腹をくすぐって、動き出したすきに穴を這い出た。堀は、この話をしたが誰もそこへ入って見るものがなかつた。それからというものは堀はそこを唯一の「鱒の御料場」としていた。

その堀が生涯で一番恐ろしかったという話は、鞍が岳の池を潜った時であつた。この鞍が岳は、加賀の白山山脈もやがて東方に尽きようとしたところに、こんもりと盛り上つた山があつて、そこは昔々々々成政に攻め立てられて逃げ場を失つた富樫政親が馬上から城砦の池に飛び込んだ古戦場であつた。毎年かれが馬とともに飛び込んだといううら盆の七月十五日に、いつもその定紋のついた鞍が浮き上つた。なかには鞍の浮き上つたのを見たという村の人もあり、その日はべつに変わりはないけれど、何ともいえぬ池の底鳴りがするといふ人もあつた。不思議なことには、馬と一しよに飛び込んだ富樫政親の姿が、その

折とうとう浮いてこなかったことであつた。

その池は深く青藍色の沈んだ色を見せて、さぎ波一つ立たない日は、いかにもその底に深い怨恨に燃え沈んだ野武士の靈魂が沈潜していそうに思われるほど、静寂な、神秘的な凄い支配力をもつて人人の神経を震わせてくるということであつた。堀はこの伝説をきいて嗤^{わら}つた。そして、かれがこの池の底を探険するということが、お城下町に鳴りひびいて噂されたのであつた。

その日、堀は得物一つ持たずに池にもぐり込んだ。しずかな午後であつた。かれはかなり永い間水面に浮かなかつたが、しばらくして浮き上つてきた彼は、非常な蒼白な、恐怖のために絶えず筋肉をびくびくさせていた。そして何人にもその底の秘密を話さなかつた。何者がいたかということや、どういうぬしが棲んでいたかということなど、一つも語らなかつた。唯かれは河師としての生涯に、一番恐ろしい驚きをしたということのみを、あとで人人に話していた。それと同時にかれは河師の職をやめてしまった。

姉は話上手であつた。これを話し終えても私はまだ睡れなかつた。そして色色な質問して姉をこまらした。

「いつたい池の底に何者がいたんでしよう。」

「そりや判らないけれど、やつぱり何か恐ろしいものがいたんでしようね。」

「では今でも鞍が浮くんでしようか。」

「人がそう言い伝えていけるけれど、どうだか分らないわ。しかし恐い池だつて。」

私は話最中にその鞍が岳を目にうかべた。それは鶴来街道つるぎを抱き込んだ非常に寛やかな

高峯で、この峯つづきでは一番さきに、冬は、雪が来た。

「富樫さむらいつて武士はまだ池の中に生きているの。それとも死んでしまったの。」

「それが分らないの。生きているかもしれないわ。」

姉は脅かすように言つて、

「もうお寝み。」と言つた。

私は軽い恐怖をかんじて姉にびつたりと抱かれていた。姉の胸は広く温かかった。やがて私は姉のあたたかい呼吸を自分の頬にやさしく感じながら眠つた。

三

私どもの市街まちの裏町のどんな小さな家家の庭にも、果実のならない木としてはなかった。

青梅の頃になると卵色した円いやつが、梢一杯に撓たわみ零こぼれるほど実ったり、美しい真赤なぐみの玉が塀のそとへ枝垂れ出したのや、青いけれど甘みのある林檎、杏、雪国特有のすもも、毛桃などが実った。

私もは殆んど公然とそれらの果実を石をもつて叩き落したり、塀に上つて採つたりした。ちようど七つ位の子供であつた私もは、そうした優しい果実を掠奪してあるくためには、七、八人ずつ隊を組んで裏町へでかけるのであつた。それを「ガリマ」と言つていた。

「ガリマをしようじゃないか。」

こう発言するものがあると、みな一隊になつて果樹園町へでかけた。しかし、それは全然道路の方へ樹の枝がはみ出た分の果実に限られていた。まるで南洋の土人のような、荒いしかし無邪気な掠奪隊であつた。

だから果実の木をもつ家家の人は、子供らが道路の方へ出た分の果実を採つていても、別に咎めも叱りもしなかつた。かえつて、人のよい中年の母らしい人がにこにこ微笑わらつて見ているのもあつたりした。

「ガリマ隊の来ないうちに。」と言つて、果実を急に採り初める家もあつた。

私もよくその「ガリマ」隊に加わったものであった。「ガリマ」隊の進んで行つたあと
の道路は、ちぎられた青葉若葉が乾いた路の上に、烈しい子供の悪戯いたずらのあとをのこして
散らばっていた。

私だちは空地の草場に輪をつくつて、「ガリマ」に抛つて得た果実をみなに頒わけつこを
するのであった。そして、みな子供らしい白い足を投げ出して、わいわい言いながら、極
めて自然らしい遊びにふけるのだ。いろいろな家の果実がそれぞれ異つた味覚をもつてい
て、子供らはそれを味い分けることが上手であつた。

私もやはり裏町を歩くと、何処どこの杏がうまくて、あそこの林檎まが不味いまずということを良
く知っていた。「ガリマ」隊が陣取つていると、そこらに遊んでいた女の子供らも、みな
言い合つたように集つてくるのであつた。

「君らにも分けるよ。みな二つずつだよ。」

などと言つて、にこにこしている少女達にみな平等に分け与えることも、いつもの例に
なつていた。女の子らはややほにかみながらも、「ガリマ隊」のなかに兄さんなどもいる
ので、みな親しく分けてもらつて、隊をはなれて遊ぶのであつた。

いつごろからそういう風習があつたのか知らないが、それは決して不自然なところがな

く、また非常に悪びれたところが、見えなかった。

「少し残して行っておくれ、みな採られるとおじさんの分がなくなるじゃないか。」という家もあった。

そんな家はいい加減にして引きあげた。どちらも微笑にこにこしている間に、自然ととり交わされた礼節が、子供らの敏感な心を柔らげるのであった。

私は飛礮つぶてを打つことが好きであった。非常に高い樹のてっぺんには、ことに杏などは、立派な大きなやつがあるかぎりの日光に驕り太ふとつて、こがね色によく輝いていた。そんなときは、飛礮を打つて、不意に梢に非常な震動を与えた途端はすみにその杏をおとすより外に方法はなかった。

私は手頃な小石をもつと、ぴゅうと風を切つて梢を目掛けて投げるのであった。礮は青葉の間をくぐったり、触れた青葉を切ったりして、はつしと梢にあたるのであった。たいがい能く熟れ切つた杏の萼がくは弱くなつていて、美しい円形をえがいて花火のように落ちてくるのであった。そういうときは、子供らは一斉に歓喜に燃えた声をあげた。

私はまたよく河岸へ出て、飛礮を打つたりしたものであった。ともかく、私の飛礮は、遊び友達の中でも非常な腕利うでききとして相応な尊敬を払われていた。たとえば、Aの町の

「ガリマ」隊と、Bの町の「ガリマ」隊とが、よく静かな裏町で出会すことがあった。そんなときは、すぐに喧嘩になった。そんな時は、たいがい石を投げ合うので、私が一番役に立った。

私はいつも敵の頭を越す位に打った。一個ひとつから二個ふたつ、三個という順序に、矢つぎ早に打つのが得意でそれが敵をして一番恐怖こわがらせるのであった。私はたいがい脅かしにやっていたが、飛礫打ちの名人として、私が隊にいと敵はいいかげんにして引上げるのであった。

喧嘩が白兵戦になると、随分ひどい撲り合いになるのであった。竿やステッキで敵も味方も滅茶苦茶になるまで、やり続けるのであった。私は組打ちが甘うまかった。そのかわり四人に組敷かれて頭をがん張られることもすくなくなかった。私はどういふ時にもかつて泣かなかつたために、仲間から勇敢なもののように思われていたが、心ではいつも泣いていたのだ。

四

小学校ではいちばん唱歌がうまかった。作文も図画もまずかった。私はいつの間にか家でおとなしかつたが学校では暴れものになつていた。私はよく喧嘩をした。喧嘩をするたびごとに私が加わつていてもいなくても、私が発頭人にさせられた。そして「おのこり」によく会つた。

私はたえず不安な、胸の酸^すくなるような気で学課のはてるのを待った。それは先生が私の読み方一つが違つていても、他のものが間違つてはそうではなかつたが、私だけはいつも居残りを命ぜられたからであつた。「今日もやられるかなあ。」と考へているときつと、

「室生、かえつてはいけない。」と居残りの命令にあつた。

私のちよいとした読みちがいでもそうだ。ことに喧嘩から疑われて一週間も教室に残されたことは、殆んどいつものことであつた。私の犯さない罪はいつも私の弁護する暇なく私の上に加わつていた。私は誰にも言いたいだけの弁護ができなんだ。

私の教室の寂しいがらんとした室内に、一時間も二時間も先生がやつて来て「かえれ」というまで立つていなければならなかつた。学友の帰つて行く勇ましい群が、その窓から町の一角まで眺められた。みな愉快的な、喜ばしげな、温かい家庭をさして行つた。かれ

らの帰って行くところに彼らの一日の勉強を酬^{むく}ゆるための美しい幸福と慰藉^{むく}とが、その広い温かい翼をひろげているようにさえ思われた。私はその緑樹や、家にいる姉の優しい針仕事のそばで話しする愉快を考えて、たえず兎のように耳を立て、今にも先生が来てかえしてくれるかと、それを一心に待っていた。

私は教室の硝子が何枚あるかということ、いつも私の立たされる柱の木目^{もくめ}がいくつあるかということ、ボールドにいくつの節穴があるかということを知っていた。私はしまいは窓から見える人家の屋根瓦が何十枚あつて、はすかに何枚並んでいるかということ、はすかいの起点から下の方の起点が決して枚数を同じくしない点からして、殆んど四角な屋根が、決して四角でないことなどを諳^{そら}んじていた。

沢山の生徒の前で、

「お前は居残りだ。」

こう先生から宣言されると、沢山の生徒らにたいして私はわざと「居残りなんぞは決して恐くない。」ということを示すために、いつも寂しく微笑した。心はあの禁足的な絶望に蓋せられているに聞わらず、私はいつも微笑せずにはいられなかった。

「なにがおかしいのだ。馬鹿。」

私はよく怒鳴^{どな}られた。そんなとき、私は私自らの心がどれだけ酷^{ひど}く揺れ悲しんだかということを知っていた。おさない私の心にあの酷い荒れようが、ひびの入った甕^{かめ}のように深く刻まれていた。私はときどき、あの先生は私のように子供の時代^{とき}がなかったのか、あの先生のいまの心と、私のおさな心とがどうして合うものかとさえ思った。

しかし私は先生に憎まれているという、心理上の根本を見るほど私はおとなではなかった。私は憎まれていた。——私は、先生のためならば何んでもしてあげたいと思っていた。私の所有品、私の凡^{すべ}てのものを捧げていいから、この苦しい居残りから遁^ぬれたいと思っていた。その半面に私はときどき、とても子供が感じられない深い残酷さの竹篋^{しっぺ}返しとして、あの先生がこの学校へ出られないようにする方法がないものかとも考えていた。そういう考えはどうてい実現できなかつたし、また、そういう考えをもつことも恐ろしいこと思っていた。

家庭^{うち}では毎日居残りを喰うために母の気嫌が悪かった。珍らしく居残りをされなかつた日は、こんどは母がやはり居残りにされたんだらうと言って責めた。私はどうすればよいか分らなかつた。

私は人気のない寂然^{しん}とした教室で、ひとりで涙をながしていた。

「ね。早くかえっていらつしやい。あなたさえ温和おとなしくしていきりや先生だつてきつと居残り
りはしなくなつてよ。あなたが悪いのよ。みな自分が悪いと思つて我慢するのよ。えらい
人はみなそうなんだわ。」

こう言つてくれた姉のことばが頻しきりに思い出されていた。私はしらずしらず教壇の方へ
行つて、ボールドに姉さんという字をかいていた。私はその字をいくつも書いては消し、
消しては書いていた。

その文字が含む優しさはせめても私の慰めであつた。姉の室の内部が目には浮んだ。姉の
寂しように坐つている姿が目に入った。私は泣いた。

その時、突然教室の戸が開いた。そして先生のあばた面が出た。私は目がくらむほど吃くつ
驚して、指定された柱のところへ行つて棒立ちになつた。私の空想していた花のような
天国的な空想が、まるで形もないほど破壊こわされたのであつた。

「何をしているんだ。なぜ命令いひけたところに立つていないんだ。」

私は肩さきを酷く小衝かれた。私はよろよろとした。私は非常な烈しい怒りのために膝
がガタガタ震えた。私は黙つて俯向うつむいていた。何を言つても駄目だ。何も言うまいと心で
誓つた。姉もそう言つてくれたのだ。

「なぜ先生の言いつけ通りをしないのだ。」

このとき、私は横顔を撲はられた。私は左の頬がしびれたような気がした。それでも私は黙っていた。私はここで殺されてもものを言うまいという深い懸命な忍耐と努力とのために、私は私の唇くちびるを噛んだ。私はこの全世界のうちで一番不幸者で、一番ひどい苦しみを負っているもののように感じた。

「よし貴様が黙っているなら、いつまでも其そこ処こに立っておれ。」

こう先生は言つて荒荒しく教室を出て行った。私はやっと顔をあげると、いままで慄こらえていたものが一度に胸をかき上った。顔が火のように逆上した。私は痛い頬に手をやって見て、そこが腫れていることに気がついた。私は撲はられたとき、もうすこしで先生に組付くところであつた。けれども慄こらえた。

私はもう午後五時ごろのように思った。そして窓から見ていると先生方はみな帰って行った。そのなかに私の先生もいた。そうだ。先生が帰つては、もうとても帰してくれるものがないのだ。

私はすぐに自分の席からカバンを取ると、さっさと帰った。そとは楽しかった。うちへかえると母は小言を言つた。

「また居残りでしょう。」

私は姉の室へはいるともう眼に一杯の涙がたまつた。姉はすぐに直覚した。私は姉に縋りついて心ゆくまで泣いた。

「あなたの先生もひどい方ね。ちよいとお見せ。まあ可哀想にね。」

姉は私の頬を撫でて、涙をためた目で私を見つめた。私は胸が一杯でものが言えなかつた。言いたいことが沢山あつた。しかしどうしても口へ出なかつた。

「あたし先生に会つてあんまり酷いつて言つてやろうかしら。」

姉は昂奮して言つた。

「いけない。いけない。そんなことを言つたらどんな目に会うかしれないの。」

私は姉をゆかせまいとした。

翌日起きると私は渋りながら登校の道を行つた。私は昨日逃げて帰つたのを咎められる不安や、またあの永い居残りを思うだけでも気が滅入り込むのであつた。雨は両側の深い庇からも流れていた。ほかの同級生はみな元氣に歩いて行つた。私は学校の「野町尋常小学校」と太い墨でかいた門のところで、極度の嫌悪のために牢獄よりも忌わしく呪うべき建築全体を見た。「私はなぜこんなところで物を教わらなければならぬか。」という心

にさえなつた。あの商家の小僧さんのように何故自由な生活ができないのかとさえ思った。先生はそしらぬ振りしていた。私はよろこんだ。私がいつまでも昨日残っていたものだと思つていたので、心を安んじていた。五限がすむと生徒が行列をつくつて下駄箱の方へ行くのであつた。私も「きようこそ早く帰れるのだ。」とひそかに心を躍らせた。そして、先生の前を通ろうとすると、

「お前は居残るんだ。」

いきなり襟首をつかんで、行列から引きずり出された。まるで雀のようにだ。私はかつとした。腸がしぼられたように縮み上つた。真赤になつた。ものの二分も経つと私はよく馴らされた厚顔さに、その凶凶しい気持ちですつかり自分の心を支配し出したことを感じた。「どうにでもなれ。」という気になつた。私の目はいつものようにじつと動かなくなつた。頭から足まで一本の棒を刺し徹されたような、しっかりした心に立ち還つていた。私は昨日のように教室に立っていた。

「一枚二枚三枚……。」

と、人家の屋根瓦を読みはじめた。何度も何度も読みはじめた。気が落ちつくと、だんだん瓦の数が不明わからなくなつた。眼が一杯な涙をためていた。

私は、先生のみにくいぽつぽつに穴のあいた天然痘の痕のある頬を思いうかべた。それが怒り出すと、一つ一つの穴が一つ一つに赤く染って行った。そんなとき、私はいつも撲られた。チヨオクの粉のついた大きな手が、いつも俯向いて宿命的な苛責に震えている私の目からは、いつもそれが人間の手でなくて一本の棍棒であった。その棍棒が動きたびごと、私の全身の注意力と警戒と憤怒とがどつと頭にあつまるのであった。私の怒りはまるで私の腹の底をぐらぐらさせた。

その日は私の外に、貧しいボロを着た貧民町の同級生が私と同じように残されていた。かれは黙っていた。かれは面白そうに外を見ていた。私はかれが立っていると、さぞ私のように足がだるいだろうと思つて言つた。

「君は腰掛にいたまえ。先生が来たら言つてやるから。」

「そうか。」

と、言つてかれは腰掛に坐つた。かれは室の奥の方にいたのだ。私は入口にいたので、先生が来れば見えるのであつた。

先生が来た。私はすぐかれに注意した。

先生は、私の方へ来ないでかれの方へ行つて何か小声で叱つていた。かれは泣いて謝ま

あや

っていた。汚ない顔じゆうを涙で洗うにまかせた二目と見られない顔であった。

「では帰んなさい。」

かれは許されて出て行つた。こんどは私の方へ来た。

「何故昨日許もしないのに帰つたのだ。きさまぐらい強情な奴はない。」と言つた。

私は「また何故が初まつた。」と心でつぶやいた。

「何とか言わないか。言わんか。」

私はその声の大きなのにびつくりして目をあげた。私は極度の怨恨と屈辱とにならされた目をしていたにちがいない。

「何故先生を睨むのだ。」

私は怒りのやり場がなくなつていた。私はカバンの底にしまつてあるナイフがちらと頭の中に浮んだ。突然天井が墜落したような、目をふさがれたような気がして、私は卒倒した。とても子供の私には背負いきれない荷物を負つたようにだ。

私は間もなく先生に起された。私は気絶したのであつた。私は夢からさめたように、ぼんやり頭の中の考える機械をそっくり持つて行かれたような気がしていた。

先生は急にやさしく、

「おかえりなさい。今日はこれでいいから。」

と、私は表へ出ることができた。私は「大きくなったら……」と深い決心をしていた。「もつと大きくなったら……」と地べたを踏んだ。私の心はまるでちぎちぎちな石ころが一杯つまっているようであった。私はこの日のことを母にも姉にも言わなかった。ただ心の底深く私が正しいか正しくないかということを決定する時期を待っていた。

五

九歳の冬、父が死んだ。

朝から降りつもつた烈しい雪は、もう私がかけつけた頃は尺余に達していた。父のからだは白絹の布で覆われていた。その上に立派な一と腰がどっしりと悪魔除けにのせられてあった。父は老衰で二、三日の臥床で眠るようになつた。

お葬式の日は、やはり雪がちらちら降っていた。母と一しよに抱かれるように車に乗った。途中雪がたいへんで、行列が遅れがちであった。

私はそれからは非常な陰気な日を送っていた。父の愛していた白シロという犬が、いつも私

のそばへふらふらやって来た。毛並のつやつやしい純白な犬であった。

ある日、私は実家へゆくとゴタゴタしていて、大勢の人が出たり入ったりしていた。母は私にお父さんの弟さんが越中から来たのだと言っていた。四、五日すると母がいなくなつて、見知らない人ばかりいた。母は追い出されたのであった。

母は私にも別れの言葉もいうひまもなかったのか、それきり私は会えなかった。母は父の小間使だったので、父の弟が追い出したことが分つた。私はあの広い庭や畠を二度と見ることができなかつた。いつも茶の間で長火鉢で向い合つて話した上品なおとなしい母はどこへ行つたのだろう。私は母にも姉にも黙っていた。母はそのことを口へも出さなかつた。私はひまさえあれば、白シロをつれて町を歩いていた。

「シロ！ 来い。」

父が亡くなつてから、ねむるところもないこの哀れな生きものは、何人よりも私を好んでいたらしかつた。私はこの生きものと一緒にいると、何かしら父や母について、引き続いた感情や、言葉の端はし端はしを感じ得られるのであつた。私はどこかで母にあいはせぬかと、小さい心をいためながら、あるときはずっと遠くの町まで歩きまわるのであつた。母と同じ年頃の女にあうと、私は走つて行つて顔をのぞき込むのであつた。私のこの空しい努

力はいつも果されなかった。

姉はよく私のこの心持を知っていた。姉はもう嫁には行かなかった。いつも家事のひまには室にいて静かに針仕事で日をくらしていた。そして私がひっそりと奥庭へ入れておいたシロに、御飯をやったりしてくれた。シロはもう私の家を離れなかった。私はよく庭へ出てシロと坐って、深い考事をしていたりしていた。私はだんだん子供らしくない、むっちりとした、黙った子供になった。

シロのことでよく母から小言が出た。

「そんな犬なぞどうするの。あつちい放していらつしやい。」とよく言われたものだ。

私は、わざと放しに行くように見せてかわら磧かへなど行つて遊んでいた。

「シロ！ 行け。」

けしかけるとシロはたいがいの犬を負かした。私はそうして時間を潰してかえつて来て、「放して来ました。」と報告しておいた。

そのときはもうシロは奥庭にはいつてまるまる円まるとねていた。母は困っていたが、私がああした嘘をつくことをしらなかった。しまいには、出入の大工にたのんで母は放させたが、やっぱり帰つて来た。そんなとき、私は嬉しかった。

「道を忘れないで帰って来い。きつと来い。」

私は大工が持つてゆくときに、心の中でつぶやくのであった。

姉は、

「あんなになついたらんだから置いてやったらどうでしょう。」と母に言ったりした。

「でもお実家の犬だし、何だか気味がわるくてね。」と言っていた。そして私には、

「あんまりシロシロつて可愛がるから家から外へ行かないんだよ。」と、小言をいつていた。

けれども私はシロを愛していた。

ある寒い雪の晩方のことであつた。私はだんだん暮れ沈んで雪が青くなって見える門の前で、いつまでも歇むことのない北国の永い降雪期を心で厭いながら、あの何ともいわれない寂しい音響という音響のはたと止んだ静かな町を、寒げに腰をまげて縮んだように行く往來の人を眺めていた。近在の人であろう。みな急がしげに、しかも音のない雪道を行くのを得もいわれず淋しく見送っていた。どの人を見ても痩せて寒げであつた。

私はふと気がつくとき、白がぐつたり首垂れて、しかも耳から鮮血を白い毛並のあたりに、痛痛しく流しながら帰つて来るのを見た。私はかっとなつた。

「シロ！ 誰にやられたのだ。」

私はこの哀れな動物に殆んど想像することのできないほどの深い愛を感じた。そしてこの耳を噛んだ対手あいての犬に復讐むくしなければならなかった。

「シロ！ 行け。何処どこでやられたのだ。」

私はシロとともに無暗に昂奮して、シロの来た方の道を走った。シロは高く吠えて私よりさきに走った。

シロは裏町のある家の門のところで、急に唸り出した。門の中から黒白の斑点のある大きな犬が飛び出した。シロは私という加勢に元気づけられたために、いきなり飛びついた。けれどもシロは小さかったために仰向けに組み敷かれた。シロは悲鳴を挙げた。私はもう我慢ができなかった。いきなり下駄を脱ぐと雪の中を素足になって、上に乗りかかっているシロの敵をめちやくちやにひっぱたいた。敵は悲鳴をあげた。シロはその隙に起き上げて完全に敵を組みついて噛みついた。

「シロ。しっかりやれ。僕がついている。」

私は冷たさも知らないで雪の上をとんとん踏んだ。シロは勝った。

そこへ門の中から私とは二級上の少年が出て来た。そしてこんどは自分の犬にけしかけ

た。

「生意気言うな。きさまの犬より僕のやつは強いんだ。」

私は彼の前へ飛びかかるように進んだ。

「そんな汚ない犬が強いもんか。」

彼は真蒼になつて言った。

「犬より君の方があぶないよ。家へはいつていた方がいいよ。」

「小さなくせに生意気をいうな。」

「もう一度言え。」

こう私は言つておいて、いきなり得意の組打ちをやつた。私はかれの背を両手でしっかりと抱いて、くるりと、腰にかけて雪の上に投げつけた。そして私は馬乗りになつて自分でどれだけ撲つたか覚えなほど撲つた。私は喧嘩は早かつた。そして非常な敏活な、稲妻のようにやつてしまうのが得意であつた。

私は下駄をはいてシロとかえりかけた。やつと起き上つた彼は、「覚えていろ。」と言つた。私は冷笑してかえつた。私はそれから道でシロをなでてやつた。そして「負けたら帰るな。」と言つてきかせた。

ある日、学校からの帰途かえりみちのことであった。裏町の塀のところに上級生らしい私とは大きい少年が三人かたまって、私の方を向いて囁き合っていた。気がつくど、この間の犬の喧嘩のときの上級生が交っていた。私は直覺的に待伏せを食っていることを知った。私はすぐカバンの革紐を解いて、さきの方を固く結んだ。私の用意は、かれらの前にまで歩いてゆくうちに整っていた。

れいの少年はいきなり私の前に立ち塞がった。

「この間のことを覚えているか！」

かれは一步前へすんだ。

「覚えている。それがどうしたのだ。仕返しをする気か。」

かれはいきなり飛びつこうとした。私の振った革紐はひゅうと風を切って、かれの後腦を叩いた。かれは蹠ふくらみととした。その時まで黙っていた彼の友達が右と左とから飛びつこうとした。私はまた革紐を鳴した。そのすきに私は足を蹴り上げられた。膝皿がしびれた。私は倒れた。そして私はめちやくちやに叩かれた。私は彼らが去ったあとで目まいがして、やつと家へかえった。しかし翌日はもう元気になっていた。

学校の便所で昨日の仲間の一人に会った。私は声をもかけずにその上級生をうしろから

撲りつけておいて、漆喰の上へ投げ飛ばした。

かえりに例の上級生が五、六間さきへ行くのを呼びとめるとかれは逃げ出した。私はすぐさま手頃な小石を拾った。飛礫はかれの踝くるぶしにあたった。かれは倒れた。私はかれをそのさきの日のように撲った。沢山の学友らは私らをとり捲いていたが、誰も手出しをしなかった。それほど私はみなから敬遠されていた。私はかれを尻目にかけて去った。

私はしかしそういう喧嘩をした日は淋しかった。勝って対手を酷い目にあわせればあわすほど私は自分の中の乱暴な性分を後悔した。してはならないと考えていても、いつも外部から私の危険性が誘い出されるごとに、私は抵抗しがたい自分の性分のために、いつも淋しい後悔の心になるのであった。

私のそうした乱雑な、たえず復讐心に燃えた根強い一面は、多くの学友から危険がられていたのみならず、非常に怖れられていたので、親しい友達とはなかった。私はひとりである時、外部から私を動かすものがない時、私は弱い感情的な少年になって、いつも姉にまつわりついていた。

「お前がまあ喧嘩なんかして強いのか。おかしいわね。」

姉は、よく近所の少年らの親元から、私にひどい目にあつた苦情を持ち込まれたときに、

笑つて信じなかつた。姉の前では、優しい姉の性情の反射作用のように温和しく、むしろ泣虫の方であつた。私が学友から一人離れて帰途をいそぐときは、いつも姉の顔や言葉を求めながら家につくのであつた。姉なしに私の少年としての生活は続けられなかつたかもしれない。

六

うしろの犀川さいかわは水の美しい、東京の隅田川ほどの幅のある川であつた。私はよく磧かわらへ出て行つて、鮎釣りなどをしたものであつた。毎年六月の若葉がやや暗みを帯び、山山の姿が草木の繁茂するにしたがつて何処どことなく茫茫として膨れてくるころ、近くの村落から胡瓜きゅうり売のやつてくるころには、小さな瀬や、砂利でひたした瀬がしらに、背中に黒いほくろのある若鮎さあゆが上つてきた。

若鮎さあゆはあの秋の雁のように正しく、可愛げな行列をつくつて上つてくるのが例になつていた。わずかな人声が水の上に落ちてても、この敏感な慄ひょう悍うかんな魚は、花の散るようになつてを乱すのであつた。

私はこの国の少年がみなやるように、小さな尾籠びくを腰に結んで、幾本も結びつけた毛針を上流から下流へと、たえまなく流したりしていた。鮎はよく釣れた。小さな奴がかかっ
ては竿の尖端が神経的にぴりぴり震えた。その震えが手さきまで伝わると、こんどは余りの
歎なげばしさに心が躍るのであった。

瀬はたえずあざあーと流れて、美しい瀬波の高まりを私達釣人の目に注がす。そこへ
毛針を流すと、あの小さい奴が水面にまで飛び上つて、毛針に群むれるのであった。ことに日
の暮になるとよく釣れた。水の上が暮れ残った空の明りにやっと思わけることのできるこ
ろ、私は殆んど尾籠を一杯にするまで、よく釣りあげるのであった。

川について私は一つの話をもっていた。

それは私が釣をしに出た日は、雨つづきの挙句増水したあとであった。あの増水の時に
よく見るように、上流から流された汚物が一杯蛇籠じゃかごにかかっていた。私はそこで一体の
地蔵を見つけた。それは一尺ほどもある、かなり重い石の蒼く水苔の生えた地蔵尊であつ
た。私はそれを庭に運んだ。そして杏の木の蔭に、よく町はずれの路傍で見るとような小石
の台座を拵しらえてその上に鎮座させた。

私はその台座のまわりにいろいろな草花を植えたり、花筒を作ったり、庭の果実を供え

たりした。毎月二十四日の祭日を姉から教えられてから、その日は、自分の小遣からいろいろな供物を買って来て供えていた。

「まあお前は信心家ね。」

姉もまた赤い布片きれで衣ころもを縫って、地藏の肩にまきつけたり、小さな頭布ずきんをつくつたりして、石の頭に冠せたりした。私はいつもこの拾って来た地藏さんに、いろいろな事をしてあげるといふことが、決して悪いことでないことを知っていた。ことに、地藏さんは石の橋にされても人間を救うものだということをも知っていた。私はこの平凡な、石ころ同様なものの中に、何かしら疑うことのできない宗教的感覚が存在しているように信じていた。「きつといいことがあるわ。お前のように親切にしてあげるとね。」

姉は毎日のように花をかえたり、掃除をしたりしている私を褒めてくれた。私は嬉しかった。こうした木の蔭に、自分の自由に作りあげた小さな寺院が、だんだんに日を経るに従って、小屋がけが出来たり、小さな提灯が提げられたりするのは、何ともいえない、ただそれはいい心持であった。何かしら自分の生涯を賭して報いられてくるような、ある予言的なものを感じるのであった。私は毎朝、洗面してしまふと礼拝しに行つた。ときとすると、あぐらをかいたお膝のところところに大きな夜露がしつとりと玉をつづけていたりし

ていた。そのつぎに姉がいつも謹ましげにお詣りをしに来た。

ことに夜は森厳な気がした。木の葉のささやきや、空の星の光などの一切をとり纏めた感覚が、直接地蔵さんを崇拜する私の心を極めて高く厳粛にした。私はそこで、大きくなつたら偉い人になるように熱禱するのであった。

不思議なことは、この地蔵さんを大切にしてからは、よく蟻などが地蔵さんのからだを這っているのを見ると、これまでとは別様な特に地蔵さんの意志を継いでいるようなものにさえ思われた。蝸かたつむり牛にしてもやっぱりこの神仏の気を受けているように感じた。私はだんだん地蔵さんの附近に存在する昆虫を殺すことをしなくなった。それがだんだん長じて街路でも生きものを踏むことがなく、無益に生命をとらなくなっていた。

「お前くらい変な人はない。しかしお前は別なところがある人だ。」
母も私の仕事に賛成していた。

「しばらくなら誰でもやるものだが、あの子のように熱心にする子はない。」

私はそれらの讚嘆にかかわらず、ときとしては慙ごんなにしてこれが何になるとか、いますぐ自分に酬いられるとかいうことを考えなかった。私はこの小さな寺院の建立に、いろいろな器物の増してゆくところに、自分の心がだんだん離れないことを知っていた。ことに

私が川から拾つて来たことが、母などが直ぐ大工を呼んで立派なお堂を建てたらと言い出すごとに、ひどく反対させた。いまさら母の力を借りなくとも、私は私一個の力でこれを祭りたいと思つていた。私は私の神仏としてこれを庭の一隅に置きたかった。誰人の指のふれるのを好まなかつた。

隣家に飴屋があつた。その米ちゃんという子は庭がなかつた。私はその少年をよく庭へ入れて遊んだ。私はこの友達と積から石を運んだり、砂を持ち込んだりした。私はだんだん大仕掛けに建てて行つた。一つのも物が殖えれば、もつと別な神聖なものが欲しくなつて来た。私は町へ出て三宝や器物や花筒や燭台を購つて来た。

姉は毎日ごはんのお供物をした。私は長い庭の敷石をつたわりながら、朝のすずしい木のかげに白い湯気のがるお供米を捧げてきてくれるのを見ると、私は涙ぐみたいほど嬉しく神神しくさえ感じた。

「姉さん。ありがとう。」

私はあつく感謝した。私のいろいろな仕事を見ている姉は、いつも清い美しい目をしていた。「姉さんの目はなんて今朝はきれいなんだろう。」と心でかんじながら、私は花をかえたりしていた。

私は益益ひどく一人ぼっちになった。学校へ行っても、みんなが馬鹿のようになって見えた。「あいつらは私のような仕事をしていない。信仰をしらない。」と、みんなとは特別な世界にもっと別様な空気を吸っているもののように思っていた。先生を尊敬する心には元よりなっていないかった。あの酷い生涯忘れることのできない目にあつてからの私は、いつも冷然とした高慢の内に、絶え間もない忍辱に虐げられたあの目を目の前にして、心を砕いて勉強していた。私が成人した後、私が受けたよりも数倍な大きい苦しみを彼らに与えてやろう。かれらの現在とはもつと上に位した総ての点に優越した勝利者になつて見かえしてやろうと考えていた。

私はあの意地のわるい学友らは、もはや私の問題ではなくなっていた。全然、あの喧嘩ぜりあいや小競争ぜりあいが馬鹿馬鹿しいのみならず、その对手をしていることが最早私に不愉快であつた。

明治三十三年の夏、私は十一歳になっていた。

七

私の母が父の死後、なぜ慌しい追放のために行方不明になったのか。しかも誰一人としてその行方を知るものがなかったのかということ、私には三年後にはもう解っていた。あの越中から越してきた父の弟なる人が、私の母が単に小間使であったという理由から、殆んど一枚の着物も持ちものも与えずに追放してしまったのであった。この惨めな心でどうして私に会うことができたろうか。彼女はもはや最愛の私にもあわなないで、しかも誰人にも知らさずに、しかもその生死さえも解らなかつたのである。

私は母を求めた。私がああ小さな寺院建立の実行や決心や仕事のひまひまには、いつも行方のしれない母のために、「どうか幸福で健康でいらっしやいますように。」と祈つたのであった。この全世界にとつては宿のなかつたあの悲しい母の昨日にくらべて変り果てた姿は、どんなに苦しかっただろうと、私はじつと空をみつめては泣いていた。私がつと成人して全世界を向うに廻しても、私の母の悲しみ苦しみを弔うためには、私は身を粉にしても関かまわないとさえ思っていた。私は母を追い出したという父の弟らしい人に裏町であつたとき、私は一種の狂氣的な深い怨恨のために跳おとりかかろうとさえ思つたのであった。私がああとき、その弟の人を殺そうとさえ日夜空想したことは、決して嘘ではなかつた。私はただかれを睨んだ。その中に私は凡ての複雑な感情の激怒によって、呪わるべく値せ

られた下卑な人間を憎悪した。

私があのにいたみ易い目をして、どんなに母の容貌を描いてそれと語ることと空想することを楽しみにしていたか！ 私は人のない庭や町中で、小声で母の名を呼ぶことさえあつた。しかも永久に会うことのできない母の名を――。

私は「そうだ。人間は決して二人の母を持つ理由はない。」と考えていた。そんなとき、現在の母を忌忌しく冷たく憎んだ。私は一方には濟まないと思いながら、それらの思念に領されるとき、私は理由なく母に冷たい瞳を交したのであつた。

「姉さん。僕の母は――。」

私は時時言つたものだ。姉は思いやりの深い目で、そんなとき、いつもするように私を優しく抱きながら、

「どこかで仕合せになつていらつしやいますよ。そんなことをこれから言わないで頂戴。」
と言つてくれた。

「何処どこなんだ。」

私はすぐに烈しく昂奮した。何者にもたえがたい激怒は、母のことになると最も信頼していた姉にまで及んだ。

「そんなこわい顔をしては厭。」

「僕の顔はコワイんだ。」

私は姉から離れた。こんなときは、姉でも私の心を知ってくれないように、生ぬるい感じのもとに怒りをかんじた。もう姉さんなんぞはいても居なくても、また、愛してくれても呉れなくてもいいとさえ思っていた。世界じゅうが私を不幸にするように思って、私は益益深く怒るのであった。

「姉さんに僕の心がわかるものか。」

私はすぐ表へ駈け出すのであった。たった一人の友であるものから離れて、ひとり裏町や空地などを歩いていた私には、木やそのみどりも人家も別なものに思われた。何も彼も冷たく悲しかった。

そんなときは、何にも言わない白シロが尾ついて来た。そして彼がみな解っているような悲しい顔をしていた。——私は母とあの広い庭へ出て茶摘みをしたり、庭で父と三人でお菓子を食べたりしたことが思い出された。初夏の風はいつも若葉の匂いをまぜて吹いていた。私は小さな顔をかしげるようにして、父と母の顔を半分ずつに眺めていた。隔たりのない総ての親密さが私達親子の上にあつた。そんなとき、シロも傍の草のなかにねむっていた。

「お前はいつたい成人して何になるか。」

父はよく笑顔でたずねた。

私はだまつてにこにこしていた。

「さあ、この子は考えることが上手だから必然^{きつと}先生にでもなるかもしれない。——ね。お前そう思わないかい。」と母は言った。

「僕なになるか分らないんだ。何かこう偉い人になりたいなあ。」

私は本当に何になっていいか分らなかった。

「そうだ。ともかくも偉い人間になれ。その心掛^{こかけ}が一番いいんだ。」

「そうね。それがいい。」と母も言った。

私も目的のない漠然とした意志のもとに、ともかくも「偉い人」になりたいと思っていた。しかし軍人のきらいだった私は、それ以外に偉い人になりたいと思っていた。

「さあ。もうすこしで摘んでしまえるんだから、やって仕舞おう。」

「ええ。」

こうして父と母とは茶^{ちや}畠の中へ、あの美しい芳^{かほ}しい若芽をつみに行った。私はひとりで木の蔭^{かげ}にシロと巫山^{ふざけ}戯^{あそ}んでいた——。

私はこの平和な心を今歩きながら感じた。そして、今総てがなくなっていた。私は何も彼も無くなっていた。私は元気づいて前方さきを馳シロつてゆく白を悲しそうに見た。「あれだけが生きている。あれがみな知っている。」と思つた。「あれがもし話ができれば、よく私を慰めてくれるに違いない。」と思つた。

私は廻り歩いて郊外の慈恵院の前にでた。そこには、親のない子が沢山に集まっていた。ちようど、内の仕事の時らしく、一人の監督に連れられて、燐寸マッチの棒を葭簀よしずにならべて日光に乾すすしていた。私と同じ年頃の少年らは、みな規則正しい手なれた運び方をして、一と掴みすずつ簀すの上に棒をならべていた。棒のさきには薬品がくろく塗られてあつた。

私は静かに眺めていた。みな血色がわるくて蒼いむくんだような顔をしていた。「私と同じ親のない少年だ。私もああして働かなければならなかつたのだ。私にああいうことが出来るだろうか。」と考へた。あの冷たそうな監督の顔が私には不快であつた。そして、この院内から匂うてくる一種の嘔おうき気を催す臭気はたまらないほど、私の胸をむかむかさせた。「私がここへ来ても駄目だ。私は追放されるに定きまつてゐる。」そして私のゆくところはやはり今の家庭より外にはないのだ。

この哀れな少年のなかに目の大きな青い顔をした、しかし何処どこかに品のある美しい顔が

目についた。私は何心なくこの少年に惹きつけられた。私はじっと見詰めた。かれもじつと見ていた。私はかれの悩んでいるのが分るような気がした。弱いけれど絶えず淋しそうに大きく瞼みはる癖のある目、私はこの少年と遊んで慰めてやりたい気がした。きつとこの少年は私と遊ぶことを喜ぶにちがいないと思った。あの目の光はいま私を求めているのだ。私と話しすることに憧れているのだ。私は眼で微笑した。かれも憐寸をならべながら微笑した。私の微笑が冷笑にとられはすまいかと不安に思ったが、かれは、そう悪くはとらなかつたのが嬉しかった。

八

私の地藏堂は日を経るに順したがつて立派になった。私は何処へ遊びに行くということもせず、いつも庭へ出ていた。

垣越しに隣の寺に、年老としとつた和尚さんが庭掃除をしていられるのが見えた。私はていねいに挨拶をした。和尚さんは垣のそばへやって来て言った。

「なかなか立派なお堂が出来ましたね。」

私は裏木戸をあけて、

「這入^{はい}って御覧なすって下さいまし。」

「では拝見致しましょうか。」

和尚さんが這入って来た。そして堂のところを見まわして、

「なかなかお上手だ。」と言った。

それから和尚さんは袂から珠数を出して、合掌しながら小声で、地蔵経をよみはじめた。まるで枯れきった渋い声でうっとりするような美しいリズムを持った声であった。私はあとで、この地蔵さんを川から拾い上げて来たことなどを話した。

和尚さんは、地蔵さんの縁起について色色話してくれた。堂のところに、この小柄な坊さんは跣^{しやが}んで、いろいろな話をしてくれた。

「人間は何でも自分で善いと思つたことはした方がよい。よいと思つたことに決して悪いことはない。」

和尚さんが帰ると、私はふとこの地蔵さんを寺の方へあげたいと思つた。私は姉に相談した。

姉はすぐ賛成した。

「そりやいいわ。あの和尚さんはきつとお喜びになるわ。」

「じゃ姉さんからお母さんに言つて下さい。」

「え。今から言つてあげる。」

姉は母に相談した。母もそれがよいと言つてくれた。かえつて、俗家に置くよりも、もとは川の中にあつたのだから、お寺へあげた方がよいということになった。

和尚さんも喜んでくれた。

お寺では吉日を選んで供養をしてくれた。私が施主であつた。川の中に棄てられてあつた地藏さんは、いまは立派な御堂のなかに、しかも鐺鈴まで添えられて祠り込まれた。私は嬉しかった。

私はそれを機会としてお寺へ遊びに行くようになった。和尚さんは子供がなかつたので、私をむやみに可愛がつてくれた。私が学校からの帰りが遅いと、よく私の家へ来られた。

「まだ帰りませんかね。」

などと姉にたずねていた。

そういうとき、私はすぐにお寺へ、学校の道具を投げ出すと飛んで行った。

「和尚さんただいま。」

私は和尚さんの炉のよこへ坐った。

「よく来たの。いまちよいと迎えに行つたところだった。」

和尚さんは、いろいろな菓子などをくれた。それから古い仮名のついた弘法大師の朱色の表紙をした伝記などを貰った。

和尚さんは優しい人であつた。いつも善良な微笑をうかべてお茶をのんだり、曆を繰ったりしていた。

私はだんだん慣れると、奥の院の涼しい書院へ行つて、学校の書物をよんだり、または、つい涼しいまぎれにうとうとと少年らしい短い鼾を立てたりしていた。和尚さんは私の我儘を許すばかりでなく、心から私を愛しているらしかった。

ある日のことであつた。

「あなたはここのお寺のものになるのは厭か。」と言つた。

「来たつていいけれど、坊さんになるのはいやです。和尚さんの子になるのならいいけれど。」

「坊さんにならなくともよろしい。では厭ではないんだね。」

「え。喜んで来ます。お母さんがどう言うか知りませんが。」

「わしからお母さんにはお話する。」

この話があつてから、私は母に呼ばれた。そしてお寺に行く気かとたずねられた。私はぜひ行きたいと思つていると言つた。お寺にゆけば何も彼も私は心から清い、そして、あの不幸な母のためにも心ひそかに祈れると思つたからである。私がお寺に起居することだけでも、私は母に孝をつくしているような気がするのであつた。

坊さんにはしない条件で私はいよいよ寺の方へ養子にゆくことになつた。姉は悲しんだが、すぐ隣家だつたので、いつでも会えると言つて諦めた。

私の着物や書物はお寺に運ばれた。式も済んだ。そして私は涼しいお寺の奥の院で生活をするようになった。私は寺から学校へ通つていた。

私の目にふれた色色な仏像や仏画、朝夕に鳴る鐺鈴の厳かな音色、それから彼処そこ此処ここに点ともされたお燈明などに、これまでとは別な清まつた心になることを感じるのであつた。静かに私は時時姉にも会つた。

「まあおとなしくなつたのね。」と姉は言つていた。

「あたしお地藏様にお詣りに来たの。あなたもゆかない。」

「行きましょう。」

私達姉弟は、境内の私の地藏さんにおまいりをした。いつも新しい供物があがっていて、清潔ですがすがしかつた。

「どこか坊さんみたいね。だんだん其そんな気がするの。」

姉は言つて笑つた。

「そうかなあ。やつぱりお寺にいるからなんだね。」

私達は書院へかえると、父が出て来た。新しい父は、茶と菓子とを運ばせた。

書院はすぐ本堂の裏になつていた。

「そうして二人揃つていると、わしも子供のときを想い出す。子供のときは何を見ても楽しいものじゃ。」

父はこう言いながらお菓子をとつて、

「さあ一つあがりなさい。」と、姉にすすめた。

私達三人は、うしろの川の上を渡る風に吹かれながらお茶をのんだ。

「お父さんはお茶がたいへん好きなの。」

私は姉に言つた。父はにこにこしていた。

九

私のお寺の生活がだんだん慣れるにしたがつて、私は心からのびやかに幸福にくらしていた。

私は本堂へ行つて見たり、本堂を囲う廊下の絵馬を見たり、いろいろな起誓文を封じ込んだ額を見あげたりしていた。私の室は、私の静かさと清潔とを好む性癖によく適つて、庭には葉蘭がたくさんに繁つていた。庫裏には大きな暗い榎の大樹があつて、秋も深くなると、小粒な実が屋根の上を叩いておちた。

お寺には絶えずお客があつた。客はたいがい信者であつた。同年輩の子供をつれて来た人は、いつも私に紹介した。父は、私を自慢していた。その信者の一人で、下町の方に商いしている家の娘でお孝さんというのがあつた。

その子はおばあさんに連れられてくると、いきなり父にとりすがつて、

「照さんがいらしつて——。」と云うのであつた。

「います。さあ行つていらつしやい。」

そのお孝さんはいつも私の室へ飛び込むように入つて来た。九つになつたばかりの娘で

あつた。

私はいつも絵をかかされていた。

「もう一枚かいて下さいな。」

せがまれると、私はいつも拙い絵をかかなければならなかった。

「姉さんと呼んでいらつしやいな。一しよに行きましようか。」

「そうしよう。」

私達は庭の木戸から、三ツ葉や雪の下の生えている敷石づたいに、よく隣の姉さん呼びに行つた。姉さんと三人でいつも庭で遊ぶのであつた。

柿の若葉のかげは涼しい風を通して、その根許へしやがんで話すのであつた。私は姉とお孝さんとに挟まれていた。姉はいつも私の手をいじくる癖があつた。

「お寺がいい？ お家うちがいい？」

などと姉がたずねた。

「お寺もおうちも何方どっちもいいの。でも両方どっちにいるような気がするの。」

私は実際そんな気がしていた。一日に幾度も行つたり来たりしていたから。

「そうでしょうね。」

姉も同感した。

「でもね姉さん。晩はコワくてこまるの。誰も起きていないのに本堂で鐸たくが鳴るんだもの。お父さんにきくと、鼠ねずみがふざけて尾しっぽで鐸たくを叩くんだって——。」

「まあ。そう。」

お孝さんがコワそうにいう。

お孝さんは、ときどき面白いことを言った。

「あのね、姉さんがお好き。あたしをお好き。どっちなの。」

などと姉を笑わせることがあつた。

「みんな好き。」

などと三人は、本堂裏の方へ遊びに行った。そこはすぐ石垣の下が犀川になっていて、楓の老木や茨が繁つていた。姉さんは、大きかったので、その細い危い本堂裏へは行けなかつた。

「あぶないからお止しなさい。」と姉は言った。けれども私はそこへは行かれる自信があつた。

「わたしも行くわ。行かれてよ。」

お孝さんが茨を分けて行こうとした。姉はびっくりした。

「いけませんよ。落ちたら大変だからおよしなさい。」

勝気なお孝さんはきかなかつた。

「大丈夫なのよ姉さん。」

石垣の下は蒼い淵になって、その渦巻いた水面は永く見ていると、目まいを感じるほど
気味悪くどんよりと、まるで底から何者かがいて引入れそうであつた。

私も危ないと思つた。

「いけない。此処ここへ来ちゃ。」

彼女は楓の根許をつたつて、とうとう本堂の側面の裏へ出た。

「あたし平気だわ。あんなどころは。」

私はからだか冷たくなるほど驚いたが、案外なので安心をした。

ここから姉のいるところは見えなかつた。この堂裏にはいろいろな絵馬額のコワれたの
や、提灯の破れたのや、土製の天狗てんぐの面や、お花の束や、古い埃で白くなつた材木などが
積まれてあつた。

冷たい腐つたような落葉の匂いがこもつていた。

「あのね。さつきのね。あたしが好きか、おねえさんが好きかどっちが好きか、はつきり言つて頂戴。どっちも好きじゃいやよ。」

私はびつくりしてお孝さんの顔を見た。お孝さんは泣き出しそうなほど真面目な顔をしていた。小さい額に小まぢやくれた皺をよせて、私の顔を仰ぎ見ていた。

「お孝さんが好きだ。ねえさんには内しよだよ。」

「ほんとう。」

「本当なの。」

「まあ嬉しい。あたし気にかかつてしようがなかったの。」と神経的に言う。

私はお孝さんと姉とは別々に考えていた。お孝さんには、姉さんと異つたものがあつた。つまり「可愛さ」があつて姉さんにはかえつて「可愛がられたさ」があつた。

「あたしね。もうずっとさきから問おうと思つていたの。」

「そう。じゃお孝さんは僕の一番仲よしになつて貰うんだ。いいの。」

「いいわ。一番仲宜しよ。」

そのとき姉の高い声がしていた。呼んでいるらしかった。私も大声で応えた。私達は助け合つて、姉のいるところへ行つた。

「まあ私ほんとに心配したよ。何していたの。」

「絵馬の古いのや、天狗の面などどつきりあったの。おもしろかったわ。」と、お孝さんが言った。

私はすこし気まりがわるかった。姉が何も彼も知っていはずまいかという不安が、ともすれば私の顔を赧めようとした。けれども姉は何もしらなかった。

「私どうしようかと思っていたの。これからあんな恐いとこへ行かないでいて頂戴。」と姉は私にいった。

「これからは行かない。」と誓った。

「お孝さんもよ。」と姉は注意した。

「わたしも行きませんわ。」と誓った。

私達はそれから三ツ葉を摘みはじめた。あの芳ばしい春から二番芽の三ツ葉は、庭一面に生えていた。

姉が籠をもつて来た。

庭は広く色色な植込みの日向の柔らかい地には、こんもりと太く肥えた三ツ葉がしげつていた。

「これを照さんの父さんに上げましょうね。」と姉はお孝さんに相談した。

「そりゃいいわ。きつとお喜びなさるわ。」

三人は一時間ばかりして、大きな籠に一杯三ツ葉を摘んだ。

寺の縁側では、お孝さんのおばあさんと父がお茶をのんでいた。

「今日は。」

私はいいさつをした。おばあさんもいいさつをした。

「これをね。みんなして摘みましたの。で持って来ました。」

「どうもありがとう。たいへんよい三ツ葉ですね。」と父が言った。おばあさんも褒めた。

私達は縁側で休んだ。

おばあさんが、

「御姉弟ですね。たいへんよく似ていらつしやる。」と言った。父は、

「そうです。」と言った。

私は姉と顔を見合せて微笑した。実際は私は姉とは似ていなかった。別々な母をもって
いる二人は、似ている道理はなかった。私はこんなとき、いつも人知れず寂しい心になる
のであった。普通の姉弟よりも仲の睦じい私どもに異った血が流れているかと思うと、姉

との間を断ち切られたような気がするのであった。

おばあさん等もかえったあとで、私は一人で室にこもって、ひどく陰気になっていた。父は、

「顔のいろがよくないがどうかしたのかな。」

「いえ。何でもありません。」

と、私はやはり「ほんとの姉弟でない。」ことを考え込んでいた。一つ一つ話の端にも、私はいつも心を刺されるものを感じる弱さを持つていたために、ときどき酷く滅入り込むのであった。心はまたあの行方不明になった母を捜りはじめた。「いつ会えるだろうか。」

「とても会えないだろうか。」という心は、いつも「きつと会うときがあるにちがいない。」というはかない望みを持つようになるのであった。

この寺にきてから、私は自分の心が次第に父の愛や、寺院という全精神の清浄さによって、寂しかったけれど、私の本当の心に触れ慰めてくれるものがあつた。

私はよく深く考え込んだ挙句、人の見ない時、父にかくれて本堂に上つてゆくのであつた。暗い内陣は金や銀をちりばめた仏像が暗い内部のあかりに、または、かすかなお燈明の光に厳かに照らされてあるのを見た。そして私は永い間合掌して祈願していた。「もし

母が生きているならば幸福でいるように。」と祈っていた。がらんとして大きな圧おしつけ
て来るような本堂の一隅に、私はまるで一疋の蟻のように小さく坐って合掌していた。私
は人人の遊びざかりの少年期をこうした悲しみに閉ざれながら、一日一日と送っていた。

十

秋になると榎つがの実が、まるで松笠のように枝の間に挟まれて出来た。だんだん熟れると
丁度とび鳶の立っているようになって、一枚一枚風に吹かれるのであった。遠くは四、五町も
飛び吹かれた。

それを拾うとまるで鳶の形した、乾いた茜いろした面白いものであった。私もよく庭へ
出て拾ったものだ。秋になるとすぐに解るのは、上流の磧かわらの草むらが茜に焦げ出して、北
方の白山山脈がすぐに白くなつて見えた。

寺の庭には湧くようなこおろぎが、どうかすると午後にも啼いていた。ある日、私は
本堂の階段に腰かけてぼんやり虫をきいていた。門から姉がはいつてきた。

「なにしているの。ぼんやりして。」

姉はいそいそしていた。何か昂奮しているらしかった。

「何だか寂しくなつてぼんやりしているんだ。ほら、ひいひいと虫がないているだろう。」

――

「そうね。虫はおひるまでも啼くんだね。」

姉も階段にこしをかけた。

ふいとおしろいの匂いがした。いつも、おしろいなどつけない姉には珍らしいことだと思つた。

「あたしね。またおよめにゆくかもしれないの。」

私はびつくりした。

「どこへゆくんです。」

「よく分らないんだけど、お母さんがきめてしまったんだから、行かなければならぬわ。」

「その人を知っているの。」

「知らない――。」

「知らないひとのどこへ行くなんておかしいなあ。いつか姉さんがもっていた手紙の人だ」

ろう。」

「いいえ。」

姉は赤い顔をした。そして急に声までが変った。

「あたし嫁よめきたくないんだけれど……。」

姉は黙って涙ぐんだ。気の弱い優柔な姉のことだから、きつと、母のいうところならどういう処へでもゆくにちがいない。そして私ひとりになってしまうのは何という寂しいことだろう。

「いやだったらお母さんに断つたらいいでしょう。いやだつて——。」

「そんなことあたしには言えないの。どうでもいいわ。」

姉は投げるようにいう。

私は姉が可哀想になった。

「僕が言つてあげようか。姉さんは嫁よめくことがいやだつて——。」

「そんなこと言つちやいやよ。本当にいわないで下さい。あたしかえつて叱られるから。」

「じゃやっぱり嫁よめきたいんだらう。」

私は妬ましいような、腹立たしく性きみじか短かにこういうと、姉さんはいやな顔をした。

「あなたまでいじめるのね。あたし、ゆきたくないってあんなに言っているじゃないの。」
「だっていやじゃないんでしょ。」と、斬り込むと、

「しかたがないわ。みな運命^{うんめい}だわ。」

私は黙った。いやだけれど行くという、はつきりしない姉の心をどうすることもできなかった。

「じゃゆくのね。」

「たいがいね。」

私は寺の廊下屋根越しにお神明さんの櫓^{げやぎ}の森を眺めていた。姉が行ってしまつては、友だちのない私はどんなに話^{あいて}対手に不自由するのみではなく、どんなにがっかりして毎日鬱ぎ込んだ淋しい日を送らなければならぬだろう。姉は私にとって母であり父でもあつた。私の魂をなぐさめてくれる一人の肉身でもあつたのだ。

私はそつと姉の横顔をみた。ほつれ毛のなびいた白い頸——私が七つのころから毎日実の弟のように愛してくれたんだ。

「でもね。ときどきあなたには会いにきてよ。」

「僕の方からだといけないかしら。」

「来たっていいわ。会えればいいでしょう。きっと会えるわね。」

私は階段を下りて、庭へでた。姉は隣へかえった。

私は書院へかえると、父には黙っておいた。私は「少年世界」をひらいたり読んだりしていたが、姉が今にも行きそうな気がしてならなかった。私は庭へ出た。見るものがみな悲しく、未枯れの下葉をそよがせていたばかりでなく、川から吹く風が沁みて寒かった。

座敷から父が、

「きようは寒いから風邪をひくといけないから家へ這入ってお出。」と言った。

親切な父の言葉どおりに家へ入った。

私はだんだん自分の親しいものが、この世界から奪られてゆくを感じた。しまいに魂までが裸にされるような寒さを今は自分の総ての感覚にさえかかっていた。

四、五日して姉の嫁くことが決定した。

その日の午後、姉は晴衣はれぎを着て母とともに二台の車にのった。

私は玄関でじつと姉の顔を見た。姉は濃い化粧のために見違えるほど美しかった。そわそわと心も宙ちゆうにあるように昂奮ちゆうふんしていた。

「ちよいと来て——。」と姉は呼んだ。

私は車近くへ行つた。

「そのうちに会いにきますから待つていてくださいな。それからおとなしくしてね。」
姉は涙ぐんだ。

「では行つていらつしやい。」

私はやっとこれだけのことが言えた。胸も心も何かしら押しつけられたような一杯な悲しみに迫られていた。

「ではさよなら。」

言い交すと、車が動いた。はじめは静かに動いて、こんどは車の輪が烈しく廻り出した。姉はふりかえつた。車がだんだん小さくなつて、ふいと横町へ曲つた。私はそれを永く永く見つめていた。横町へまがつてしまったのに、まだ車が走っているような幻影が、私をして永く佇たたせた。私は涙ぐんだ。あの優しい姉もとうとう私から離れて行つてしまつたかと、私はすすごと寂しい寺の書院へかえりかかった。

私は姉がいなくなつてから、短い冬の日の毎日雪にふりこめられた書院で、父のそばへ行つたり縁側に上げてやつたシロを対手あいてに淋しくくらししていた。二週間もたったあとにも姉は訪ねて来てくれなかつた。短い葉書が一枚来たきりであつた。

別にお変りもないことと思います。姉さんは毎日忙しくて外へなど未だ一度も出たことがありませんので、あなたのところへも当分行けそうに思われません。姉さんはやはりいつまでも、おうちにいればよかつたと毎日そう思つて、照さんのことをかかんがえます。照さんは男でしあわせです。そのうち会つたときいろいろお話します。

と書いてあつた。私はこの葉書を大切によごれないように、机の引出しの奥にしまつておいた。姉のことを考へたり会いたくなつたりしたとき、私はこれを出して凝然じつと姉のやさしい顔や言葉に触れるような思いをして楽しんでいた。

私はときどき隣の母の家へ行くと、きつと姉の室へ這入つて見なければ気が済まなかつた。いつも黙つて、静かにお針をしている傍に寝そべっていた私自身の姿をも、其処そこでは姉の姿と一しよに思い浮べることが出来るのであつた。その室には、いつも姉のそばへよると一種の匂いがしたように、何かしら懐かしい温かな姉のからだから沁みでるような匂いが、姉のいなくなつたこの頃でも、室の中にふわりと花の香のように漂うていた。私は

室じゆうを見廻したり、ときには、小箆笥の上にある色色な菓子折のからに収つてある布きれ類るいや、香水のから罌などを取り出して眺めていた。何故かしれない不思議な、悪い事をしたときのような胸さわぎが、姉の文庫の中を捜さがつたりするときに、ドキドキとしてくるのであつた。

姉はさんごの玉や、かんざし、耳かき、こわれたピンなどを入れておいた箱を忘れて行ったのが、これだけがちゃんとして置いてあつた。私はそういう姉の使用物をみるごとに、姉恋しさを募らせた。

私はある日、雪晴れのした道路をシロをつれて、いそいで行つた。私はひそかに姉の嫁つた家の前を通りたいためでもあつた。川べりの前せんざい栽さいに植え込のある、役員の住みそうな家であつた。

二階は障子がしまつてあつた。家じゆうがしずかでしんみりしていて、姉の声すらしなかつた。私は、わざと犬にワンワン吠えさせたりした。それでも姉が留守なのか、一向人の出てくるけはいがしなかつた。私は、なお強く犬を啼かせた。二階の障子が開いた。そして姉の顔があらわれた。

姉は「まあ！」と口籠るように吃びく驚して、手まねで今そこへゆくからと言つた。シロ

は永く見なかつた姉の顔を見ると、急に元氣づいて前足を折つて巫山戯るふざけようにして高く高く吠えた。

姉は出てきた。

「まあ、よく来たのね。すっかり忙しくてね。ごめんなさいよ。」

私は姉の顔を見ると、もう涙ぐんでじつと見詰めた。姉はすこし瘖せて青ざめたような、乾いた顔をしていた。

「僕、来てはわるかつたかしら。」

「いえ。わるくはないけど、お母さんからまたつまらないことを言われるといけないから、こんどから来るんじゃないのよ。きつとそのうち姉さんが行くからね。」

「きつとね。」

「え。きつと行きますとも、シロはまあ嬉しそうにして——。」

シロは姉の裾をくわえて、久しく見なかつた主人にじやれついていた。

「じゃ僕かえろう。」

私はこんなところで姉と話しているのを家の人に見られると、姉があとで困るだろうと思つて、帰りかかつた。

「そうおかえり？　また今度姉さんが行きますからね。それまでおとなしくして待っていて下さいな。」

「いつごろ来てくれるの。」

「そりやまだ分らないけれどもきつと行きますわ。誓つてよ。指切をしましょうね。」

姉は私の手をとった。

私にはっこりしてあたりを見廻した。誰か見てはいはしないだろうかと、しきりに懸念された。

姉は、ずっとむかし子供の時にやったように、小指と小指とをお互いに輪につくつて、両方で引き合うのであった。

この子供らしい冗談のような些事ではあったが、何かしら私ら姉弟にとって神聖な信ずべき誓いのように思われていた。

「じゃ、さよなら。」

と私は姉のそばをはなれた。

「道草をしないでおかえりなさいな。」

「ええ。」

私は川岸のはだらに消えかかった道を行った。片側町なので誰も通らなかつた。私は「いまから姉はどうして晩までくらすのだろう。何か面白いことでもあるのだろうか。」などと考えていた。家にいるときよりいくらか瘠せたのも私にはよく感じられた。私は嫁というものは単に生活を食事の方にのみ勤むべきものであろうかなどと、悩ましく考え歩いてきた。

北国の冬の日没ごろは、油売の鈴や、雪が泥まみれにぬかつた道や、忙しげに行き交う人人の間に、いつもものの底まで徹る冷たき寒さをもった風が吹いて、一つとして温かみのないうちに暮れてゆくのであつた。

私は寺へかえると、夜は父と、茶の湯の炉に強い火を起して対い合^{むか}つて坐つていた。父は何をするということなしに、茶をのんだり曆をくつたりして一と晩を送るのであつた。

父はよく柚味噌をつくつたりした。柚釜の中を沸沸と煮える味噌の匂いを懐かしがりながら、私はいつも父の手伝いをしていた。境内の大きな榊^{つが}に寒い風が轟^{ごうごう}々と鳴るような晩や、さらさらと障子をなでてゆく笹雪のふる夜など、ことに父と二人で静かにいろいろな話をしてもらうことが好きであつた。

もはや姉に親しもうとしても、遠くへ行ってしまった後は、父と寂しい話などをきくよ

り外はしかたがなかった。

父が初めてこの寺へきたときは、この寺が小さな辻堂にすぎなかったことや、夜、よく獺かわうそがうしろの川で鮭をとりそこなったりして夜中に水音を立てたということなどを聞いた。父はよく言った。

「姉さんがいなくなつてから、お前はたいへん寂しそうにしているね。」

「ええ。」

父はよく私の心を見ぬいたように、そんなときは一層やさしく撫でるように慰めてくれるのであった。

「さあ、休みなさい。かなり遅いから。」と、いつも床へつかすのであった。

私は佗しい行燈あんどんのしたで、姉のことを考えたり、母のことを思い出したりしながら、いつまでも大きな目をあけていることがあった。うしろの川の瀬の音と夜風とが、しずかに私の枕のそばまで聞えた。

私の十三の冬はもう暮れかかっていた。

青空文庫情報

底本：「或る少女の死まで 他二篇」岩波文庫、岩波書店

1952（昭和27）年1月25日第1刷発行

2003（平成15）年11月14日改版第1刷発行

2005（平成17）年12月15日第3刷発行

底本の親本：「或る少女の死まで 他二篇」岩波文庫、岩波書店

1952（昭和27）年1月刊

入力：辻朔実

校正：門田裕志、小林繁雄

2012年12月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

幼年時代

室生犀星

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>